ATRV
アトルブ
NO. 1
2024
12

特定非営利
活動法人
多摩都市構想研
究会発行

多摩を育む

アトルブ発刊に寄せて

多摩都市構想研究会
会長　櫻井　巌

当会は多摩地域の持続的発展を目標に創設し8年を迎えます。

これまでこの地域の先端産業、交通問題や農地、山林などの自然を対象に学習を進めセミナーや勉強会を開催してきました。

こうした中で、細々ながらホームページを立ち上げ成果の発信にも努めてきました。

今後、こうした活動の積み重ねとともに、広く多摩地域への関心を高めるためには活動内容やその成果の発信の充実が求められ会報を発行することにしました。

今年度も僅かになりましたがようやく会報の第1号を発刊する運びとなりました。会報の名は、当会の英語表記の『ＡＴＲＶ（アソシエーション・タマ・リージョナル・ビジョン）』をもじり『アトルブ』としました。意味は多摩地域のビジョンです。

多摩地域には、１９７０年代以降、２３区や全国から多くの人々が移住してきました。ここに住む多くの人々がこの多摩地域に関心を高め、多摩を知り、学び、育むことを切に祈り発刊の辞とします。

今年度の活動

今年度の活動について検討するため、会長及び副会長による執行会議を２０２４年１２月２日(月)　午後２時から東洋システム（株）で開催しました。出席は、渋井副会長、飯田副会長、菊地事務局長（櫻井会長欠席）でした。

(1)『人口減少自治体の挑戦-過疎に挑む』をテーマに、来年２月中旬に奥多摩町、檜原村、茅野市の各自治体を中心にしたシンポジウムを検討しましたが、日程の折合いがつかず、次年度に改めて開催に向けた調整をします。２０５０年には、日本全体の人口が３３００万人減少すると予測され、未聞の少子高齢化の時代を迎えます。この各自治体は、現に問題意識を持ち果敢にこの課題に挑戦しています。この取り組みに学ぶ意義は大変大きいものです。なお、この各自治体への取材メモは、当会のホームページのトップ画面からご覧ください。

２　視察　来年１～３月にかけて次のテーマで検討しています。

(1)　宇都宮市等のライトレールトレイン

(2)　奥多摩町の移住者増、多摩の文化等

３　会報の発行

(1)　研究成果

①都市農地の危機

②人口減少自治体の挑戦

茅野市、奥多摩町、檜原村

③多摩モノの導入効果

(2)　多摩随想（シリーズ）等

最近の成果

１　都市農地の危機

昨年度末に元東京都農林水産部担当部長の武田直克氏に東京の農地減少の問題について講師をお願いしました。２０２２年度に生産緑地法が見直され、さらに１０年の猶予を得たものの、農地の減少の勢いは止まりません。この問題は人口が密集し地価の高い東京に特有の問題ともいえます。新鮮な野菜、果物等の生産機能だけでなく、農地が持つ都市防災や景観、食育等の重要な機能を維持する必要があります。（HP掲載中）

２　多摩モノレールの導入効果

多摩モノレールは、２０００年の上北台・多摩センター間１６kmの全線開業から２５年目を迎えます。この間、沿線の開発が進み、周辺人口も増加しています。こうした導入効果について当会の加藤昌宏理事が簡潔にまとめられました。特筆すべきは、「ゆりかもめ」や「東京モノレール」などの同種の交通システムと比べて、一日平均乗車人口が１３２千人とトップであることです。一時、空気を運んでいると揶揄された多摩モノが多摩地域の南北を駆け抜け、人々の往来や地域の活性化に貢献していることが示されています。（HP掲載中）

玉川上水が拓いた多摩地域

多摩随想（1）

江戸幕府における参勤交代は、１６３５年第三代徳川家光の時代に制度化されました。このため大名やその家臣と家族など、江戸の人口が増加し、武家屋敷の建設により商人や職人も江戸に集まってきました。

江戸幕府開府まもない頃の約１５万人が、１７世紀後半には武家、町人を合わせて１００万人を超える大都市に成長し、さらに、１２０万人にまで増加したと言われています。１８０１年のロンドンの人口約８０万人、パリの人口約５０万人と比べても世界の都市のなかでトップクラスでした。当然、水や食糧の不足が深刻化し、衛生問題や火災のリスクも高まります。

東京都水道局のホームページによると、東京の水道の歴史は、遠く江戸時代にさかのぼることができると書かれています。

「江戸時代の水道は上水とも呼ばれ、石や木で造られた水道管（石樋・木樋）によって上水井戸に導かれ人々はそこから水をくみあげて飲料水・生活用水として使用しました。

江戸上水の起源は、１５９０年、徳川家康の江戸入府時に開設されたともいわれますが、確実なものは三代将軍家光の代までに完成した神田上水と考えられます。

その後、上水は順次拡張され、１６５４年には玉川上水が建設され、さらに１６９６年までに、本所（亀有）、青山、三田、千川の各上水が整備されました。

しかし、１７２２年、神田・玉川両上水以外の４上水は廃止され、江戸時代の後半は主に神田・玉川の２上水が江戸の暮らしを支えました。」（東京都水道局）

急速な人口増のもとで、神田川などの小規模な河川からの用水では不十分であり、大規模河川の多摩川を活用することになったのです。こうして建設された玉川上水は、江戸の飲料水や灌漑用水を供給し、都市の発展に寄与し、同時に住民の生活環境を改善する役割を果たしました。

玉川兄弟の兄庄右衛門、弟清右衛門は、１６５３年から５４年にかけて玉川上水の開削の指揮をとり、羽村取水堰から四ツ谷大木戸までの全長約４３キロメートルの上水をわずか８か月で開通しました。

工事は二度失敗しています。日野を取水口としたときには浸透性の高い関東ローム層に、２回目に福生を取水口としたときには、岩盤に当たりました。

３度目１６５３年、羽村から取水する工事により１６５４年に開通しました。これにより兄弟は「玉川」の姓を名乗る事が許され、上水の管理も１７３９年に職を剥奪されるまで玉川家の世襲とされました。

さて、玉川上水から引かれた用水は、野火止用水や砂川用水などとして主に農業用水や日常生活用水として利用されました。そのおかげで、水利の悪かった土地もどんどん開墾され、玉川上水を取り囲むように各地に新田ができたのです。

玉川上水は、農地に水を供給するための重要なインフラとして機能し、江戸の周辺地域の開発、農業生産の向上をもたらし、都市への食料供給も安定しました。西武線や中央線沿線の今があるのは、玉川上水のおかげといっても過言ではないでしょう。

玉川上水は、明治の初期に一時運輸手段として活用されましたが、衛生上の理由ですぐに廃止されています。

「その後、上水路の汚染や木樋の腐朽、消防用水の確保などの課題に、１８８６年のコレラの大流行が拍車をかけ東京の近代水道が創設されます。この水道は、玉川上水路を利用して多摩川の水を淀橋浄水場へ導き沈でん、ろ過のうえ、鉄管により市内に給水するものです。１８９８年に神田・日本橋方面に通水し、順次拡大、１９１１年に全面的に完成しています。」（東京都水道局抜粋引用）

訃報

当会元副会長　東京都立大学名誉教授
田村紀之様(享年８２歳)
１０月２日に御逝去されました
謹んでお悔み申し上げます